

研究主題 「カリキュラムマネジメントを生かした魅力ある学校づくりに向けて」 ～社会に開かれた教育課程における義務教育9年間の学び～

提言者：小城多久地区教頭会 小城市立芦刈中学校 大串 厚子

1 主題設定の理由

研究1年目は多久市内義務教育学校としての9年間の教育活動の取組について検証した。2年目は、小城市内での義務教育9年間を通しての各学校の教育活動について更に研究を進める。小城市内には4つの中学校と8つの小学校がある。その中で芦刈中学校と芦刈小学校は小中一貫校である。小城市内の各学校の規模や形態、地域性等に違いはあるが、教育活動の質をより高めていくために、小中連携を意識している。各教科主任研修会、教頭会、教務主任会、中学校進学説明会や人権・同和教育実践交流会を通して意見や情報交換を行い、義務教育9年間の教育活動について理解を深めている。研究2年目では、カリキュラムマネジメントの実践から義務教育9年間の教育活動について把握することにした。カリキュラムマネジメントとは、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を達成するための手立ての一つであることは、言うまでもない。今回カリキュラムマネジメントの状況を把握することでより一層、児童生徒が何を学び、何ができるようになったかを明確にすることができると考えている。そのため、カリキュラムマネジメントのいわゆる三つの側面を、確認しながら進めていきたい。三つの側面とは、①児童生徒がこれからの時代に求められる資質・能力の育成に必要な各教科等の「主体的・対話的で深い学び」からの授業改善がなされているか。②PDCAサイクルの確立がなされているか。各教科等の年間指導計画をもとに授業の実践とその振り返りを組織で共有しながら、学校教育目標にたどり着けているか。③資源の活用がなされているか。である。この三つの側面を確認しながらカリキュラムマネジメントの進捗状況を把握し、今後の学校運営に反映させることがねらいである。カリキュラムマネジメントには、教師一人一人の当事者意識が必要である。教師の意識を知ること、義務教育9年間の教育の質を高めることにつながるはずである。「社会に開かれた教育課程」の更なる実現を目指し

て、副校長・教頭としてどのような役割を果たしていくべきかを探るために本主題を設定した。

2 研究のねらい

各学校では学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」の実践を通して義務教育9年間の学校づくりを進めているが、特にカリキュラムマネジメントの状況について小城市内の各学校での取組みがどうであるのか、見直しが必要ではないか、又は、形骸化しているのではないかと危ぶまれる。その解決策の一つとして小城市内の学校にカリキュラムマネジメントの三つの側面の進捗状況についてアンケートをとることにした。そうすることで、これまで行った内容についての見直しの機会につながる。副校長・教頭がアンケートで知り得た内容を教員に伝達することで客観的に自分の取り組みを振り返ることができる。そのことが更に「社会に開かれた教育課程」を発展させていくことになり、課題解決につながると思っている。

3 研究の経過（計画）

- (1) 1年次（令和5年度）
 - ・令和4年度義務教育学校教育研究会アンケート調査の分析、考察
 - ・課題解決に向けた2年次の研究計画の検討
- (2) 2年次（令和6年度）
 - ・研究課題の明確化
 - ・2年次の課題解決に向けた方策と実践
 - ・考察、3年次の研究計画の検討
- (3) 3年次（令和7年度）
 - ・3年次の課題解決に向けた方策と実践
 - ・考察、3年間の研究の成果と課題のまとめ

4 研究の概要と成果

- (1) 研究の仮設

カリキュラムマネジメントの三つの側面について進捗状況の確認をすれば、教職員一人一人が、

自分の日々の教育活動が学校運営に大きく関わっていることに気づくであろう。また、児童生徒の「生きる力」とは何なのか再確認できるであろう。副校長・教頭が、その過程において教職員に関わりをもてば、更に義務教育9年間の教育活動の質が高まるであろう。

(2) 研究の実際

各学校で取り組まれているカリキュラムマネジメントについてアンケートを作成し、実施することにした。副校長・教頭は自分の学校の教育課程の中にどうカリキュラムマネジメントが行われているのか、又、教員はどのような意識の基で行われているのかを把握しなくてはならない。カリキュラムマネジメントは現行の学習指導要領の理念であり「社会に開かれた教育課程」を実現するための要である。子どもが将来、社会に出た時に生きて働く力となることを踏まえ現任校の現状を振り返り、副校長・教頭としてどう指導助言をあたえることができるのか研究することにした。

① アンケートの作成について

アンケートの項目は、次の通りである。

- ア 授業改善について
- イ PDCAサイクルについて
- ウ 資源の活用について
- エ 現在取り組んでいるカリキュラムマネジメントを意識した教育活動例について
- オ 学校運営への参画意識について

② アンケート作成の留意点

上記内容でアンケートを作成するにあたり、小城市教頭会は、次のことに留意することを決めた。「質問内容は平易であり、説明は、簡潔であるか。」「尋ねられている内容はどの教職員にもわかりやすいか。」である。若手教員の増加と教職経験の浅い教員が混在している現状から、問われている内容について理解が得られるかどうかは課題であるが、今回のアンケートを機会に、普段の教育活動について分かっていることと、そうでないことの棲み分けをすることも可能になり客観的に普段の教育活動を見直す機会となることが期待できる。

普段の授業をこなしていくことが精一杯であり、現在行っている教育活動は、カリキュラムマネジメントの一環であるという意識は低い。ましてや、「社会に開かれた教育課程」という

キーワードすら覚えていない職員もいるのではないかと懸念する声も上がった。そのため、アンケート実施に際しては、校長会の支持を受け、副校長・教頭による丁寧な説明とアンケート実施にいたる経緯を説明し行うこととした。

③ 副校長・教頭の関与について

教育課程についてのアンケートの実施に際して、小城市内の全教職員にとって改めて学習指導要領を読み返したり、カリキュラムマネジメントについて学習したりする機会となり職員研修としての活用にもなった。

④ アンケートの結果について

質問は全部で15準備した。記述式回答は5カ所、選択式回答は10カ所設けた。ここでは、中心的な質問について分析する。

○ 「教科横断的な取り組みはどの分野で行われているか」

教科横断的な取り組みについては、各学校で「人権・同和教育」「環境教育」「平和教育」「特別支援教育」において行われていた。各教科で学んだことを統合して学習しているという認識が職員の中にあることが読み取れる。

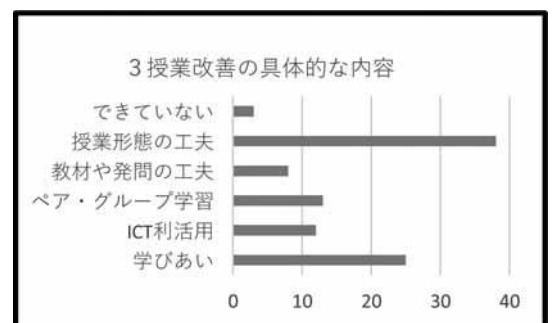
○ 「主体的・対話的な深い学びのための授業改善を意識して行っているか」

「行っていると思う」と回答した教員は、86.7%であり、授業改善は浸透していると言える。

○ 「主体的・対話的で深い学び」の授業展開のために、授業改善されていることは何か。具体的に書いてください。」

記述された内容を項目別にまとめたものが次のグラフ【資料1】である。

言語活動を活用し、児童生徒の考えを引き出そうとする取り組みがなされ、『学び合い』の授業形態を参考に自分なりにアレンジした授業改善の様子の記述があった。



【資料1】アンケート結果

実際には、以下の通り記述されている。

- ・教師からの一方的な授業だけでなく、生徒たちが自分たちで考えることができる時間を設け主体的活動を取り入れている。
- ・自分で考えたり、表現したりする場を必ず入れている。児童同士の話し合いの場（二人、三人等の少人数）をできるだけ取り入れている。深い学びを目指して問い返しの発問をするようにしている。
- ・学習のゴールや学習計画を共有することで、子どもたちの主体的な学びを進められるように意識している。また、目的を提示して話し合い活動を行うことで、さまざまな意見で学習を深めることを意識している。
- ・国語科の学習で、役になりきって隣の人に音読したり、発表した人の音読のやり方をまねしたりする。算数科では、自分で問題をつくり、問題を出し合っている。

研修の成果もあり教師自身主体的に取り組んでいることがよく分かった。

○「振り返り活動の状況」

「している。大体している」と回答した教員は、73.7%。「していない。あまりしていない。」は26.3%であった。「振り返り活動」については、PDCAサイクルを回すことで授業改善の実践につながるため、カリキュラムマネジメントには、欠かせない取り組みだと考える。振り返り活動を授業者と児童生徒にどうフィードバックしているかは、次の通りである。

(授業者へは)

- ・教材改善、授業内容の改善、児童生徒が授業を理解しているかの確認、評価のための活用。

(児童生徒へは)

- ・振り返りのやり方の指導、今後の学習につながる助言、評価として戻す、補充学習の手立てを伝える、という内容であった。

授業者へも、児童生徒へも「振り返り」活動を「特にしていない、検討中」と回答した職員がいるという現状については改善していく必要がある。

○「授業での振り返りを同僚と共有しているか」の質問には、ほとんどの教員が共有していな

いことがわかった。

- 「学校教育目標をふまえて、日々の教育活動を行っているか」の質問には「している、大体している」と回答した職員は、93.4%であった。学校教育目標実現を目指し、職員が一丸となって取り組むためには、自分たちの現状について職員室等で話題にすることを常態化することが望ましいと考える。積極的に進めていきたい。
- 「教育活動にヒト、モノ、カネとなるものを投入していると思うか」という資源の活用について質問したところ63.8%が「そう思う、大体そう思う」と回答している。「資源の活用」によって教育効果が上がるという認識は、浸透していないようである。さらに「どの資源を使っているか」という質問には、ヒトが76.5% モノ50.8% カネ23% 情報56.8% 時間46.4% その他3.3%という結果がでている。教員は、資源を活用するという概念がない場合もあり、資源を有効に活用するという視点をもつことは必要であるので推進したい。
- 「各学校でのカリキュラムマネジメントの取り組み例」については、以下に示している。
 - ・コミュニケーション力を高める授業実施（つながるタイム）
 - ・保健の授業において他の教科と協力し、横断的な授業をしている。
 - ・整理整頓コンテスト【写真1】を実施し、審査員を事務職員の先生に審査をお願いしている。学校備品を管理していただく立場からの審査に加わっていただくことで、一般的にどう見られるかが分かった。



【写真1】整理整頓コンテストの様子

- ・学校行事を計画的に入れながら、教科横断的に人権・同和教育を行っている【写真2】



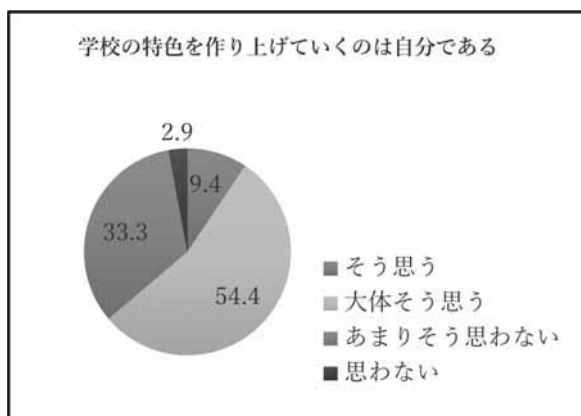
【写真2】人権集会の様子

・西九州大学の留学生との交流活動【写真3】を通して人権について世界的視野を感じることができた。



【写真3】交流活動の様子

○「学校の特徴を作り上げていくのは自分である」という意識の基、カリキュラムマネジメントに取り組んでいる」質問については、次の通りである。



【資料2】アンケート集計

「あまりそう思わない。思わない。」の回答は全体の36.2%であった。【資料2】その主な理由は、次の通りである。

- カリキュラムマネジメントについての知識不足・意識して授業を行っていない。
- もっと教員間が話したり、相談したりできるような時間を生み出せるような仕組みになってほしい。
- 日々の授業に追われ、考える余裕がない。
- 他の先生との共有の場があまりない。
- 組み合わせることが難しいから。
- 教育課程は決められているといった感覚なので、自らカリキュラムマネジメントをしている意識はない。
- 勉強不足でカリキュラムマネジメントの概念をしっかり掴めていないが、年間計画ががっちり固められており、生徒の実態に応じた臨機応変な教育活動ができにくい状況があると思う。
- カリキュラムマネジメントという言葉を知り、調べた。一部についてはできていると思うが、一部できていないと分かったため、今後は、意識していきたい。

5 今後の課題

「社会に開かれた教育課程」について小城市内小中学校の取り組みについてアンケートをとった。義務教育9年間で児童生徒が学んだことを、「生きる力」としてつないでいけるよう、カリキュラムマネジメントが実践されていることが分かった。

本研究を通しての新たな問題や解決に至らなかった点については、教員同士が情報共有を行ったり、教育活動について十分協議をしたりする場面と時間の設定ができていないということである。日々の業務に追われても余裕をもって児童生徒に対応しようとしている状況の中で、学校運営に直接参加をしているという意識をもつことは難しい。又、今回のアンケートからは、児童生徒の資質・能力の向上についての確認はできていない。

今後の研究の方向性としては、教師一人一人がカリキュラムマネジメントを自分事としてとらえるようにどう働きかけることができるかである。日々の教育実践こそが学校教育目標の具現化につながり、児童生徒の「生きる力」に変わっていくことを繰り返し伝えることが副校長・教頭の果たすべき役割であると言える。